

## 「地域学のすすめ」 佐藤修

2000年8月、NeoALEX 社会構想研究院での講演記録

それでは、これより佐藤修先生の「地域学のすすめ」をスタートします。

佐藤 佐藤でございます。今日は「地域学のすすめ」、副題には少しややこしい言葉を使っていますが、「 commons の回復をめざして」というテーマでお話しさせていただきたいと思っております。

学生のみなさんはともかく、市民の方がせつかくの土曜日にわざわざこうして学びにやってくるということは、さぞやみなさんは勉強がお好きなのだとお察しします(笑い)。みなさんは学校の頃も学ぶことは好きだったのでしょうか。(フロアとの若干のやりとり。なお、フロアと称しても今回の学びの場ではステージや教壇なるものはなく、話者はすべてひとつのフロア上にいた)学校の勉強はともかく、みなさん学ぶことがお好きなのですね、実は私は子どもの頃から勉強は大好きでした。でも、学校は大嫌い(笑い)。学校の勉強というのは大嫌いで、でも、やむを得ず行っていて、学校では図書室にいて本を読んでいたりと、ということもありました。

それはともかく、学ぶということは本当はすごくワクワクすること、楽しいことなんだと思うんですね。ところが、最近の日本では学ぶということがなんかワクワクしない。つまらないこと、あるいはつらいことになってきている、という気がします。

まあ、ここにご参加の宮城大学の学生さんは学ぶことが楽しいということですが、これだけ立派な校舎であればそうなるのかもしれませんが。でも、一般的にはなぜか学ぶことがそれほど楽しいことではなくなりました。その理由を考えればいろいろあるわけですが、そのひとつとして、「センス・オブ・ワンダー (sense of wonder)」ということを考えてみたいと思います。

「センス・オブ・ワンダー」。お聞きになったことはあるでしょうか。レイチェル・カーソン (Rachel Louise Carson : 1907- 1964) という人はご存じでしょうか。カーソンという人はもう亡くなってしまったアメリカの女性海洋生物学者ですが、今から40年ほど前に、『沈黙の春』という本を出したんですね。この本は最近話題になっている地球環境問題に対する最初の警告の書といわれているんです。どういう本かといいますと、今のまま工業化が進んでゆくと、春になっても草花の若芽は芽吹かず、花も咲かない、鳥はさえずり出さない、川に行っても魚たちが泳いでいない、そういう灰色の沈黙の春がやってくる、という問題提起をしたのです。それが日本でも、複合汚染という問題意識を生むひとつのきっかけとなっていきます。彼女は癌で亡くなるのですが、その直前に書きためたものを本にしたのが、この『センス・オブ・ワンダー』です。

「センス」というのは感性とか、気持ちということですね。「ワンダー」は驚くということで、驚く気持ちということになります。この本の表紙の帯に説明の文章がありますね、ちょっとそれを読み上げてくださいますか。

「子どもたちへの一番大切な贈りもの。美しいもの、未知の物、神秘的なものに目を見はる感性〔センス・オブ・ワンダー〕を育むために、子どもと一緒に自然を探検し、発見の喜びに胸をときめかせる」

はい。ありがとうございます。自然とはものすごくおもしろいもの、そのことに気づき、そのおもしろさに驚く気持ち、そうしたセンス・オブ・ワンダーこそが、実は学び

の原点なのではないか。その「センス・オブ・ワンダー」について、彼女はとても平易なことばで、この本で語っているのです。

ところで、私たちは学校でいろいろな知識を学びましたが、どうもその学んだ知識が、私たちの生活だとか、いのちということにつながってこない。身近な自然に直接に触れあって、自分の目で実感し発見するということは、わくわくすることですが、教科書や実験室での勉強では、なにかわくわくしないのですね。また、歴史にしても学校で習うような世界史だとか日本史というのは、どうも今ひとつ私たちの生活につながってこない。自分の生活とつながっていないために、どうしても観念的な知識の領域を出ないわけです。

私たちはどうも、知識として、あるいは言葉として、いろいろなことを学ぶということに偏りすぎているのではないか、と思います。そこには、センス・オブ・ワンダーがないわけです。センス・オブ・ワンダーということが、学びの場から失われてきていると言ってもいい。ここに学ぶことがわくわくしなくなった理由があるのではないか、と思います。

学ぶということはどういうことか、あるいは学びながら育てゆくということはどういうことか、ということですが、やはり私たちは自分の目で見る、自分の心で感じる、自分の頭で自分なりに考えるということ、そして自分の言葉で話すということ、これが学びの原点なのではないか、と思います。しかし、私たちがこれまで学んできたことの多くは、自分の目で見るのではなくて、誰かの目を見たことを誰かの言葉で読み聞きし、あるいは誰かが考えたことをその言葉どおりに憶えてきたのではないか。感じることにしても、ピカソの絵をみて感じることはみな、それぞれに違うはずですが、その絵から伝わってくるものはこういうことだということが決められていて、それを感じるようにならなければだめだ、というように、知らず知らずのうちに何かを押しつけられているような気がします。

学ぶことをわくわくするような楽しいことにしてゆくためには、そうした押しつけではなく、それぞれのセンス・オブ・ワンダーを育ててゆくこと、あるいは自分の目で見て、自分の心で感じて、自分の頭で考えて、自分の言葉で話すということを大切にしないといけないのではないかな、と思います。

もし、そういう具合に学びというものをとらえてゆくなれば、学びの対象というものは、どうも今学校で教えていることだけではないのではないか、という気がします。これが今日、私がお話しさせてもらおうとしている「地域学」につながっていきます。

学ぶことの楽しさということからいえば、地域を学ぶこと、というのはとても楽しいことなのです。自分の生活にもつながってきますし、手応えがある。なによりも自分の目や身体で実感できるのです。

みなさん方はこの地域でお育ちの方々ですか。(やりとり)たとえば、今日、私は東京から仙台を經由して、ここに地下鉄で来たのですが、泉中央の駅の前が八乙女という駅ですね。八乙女とはどういう意味なのですか。なぜ、八乙女なのですか。(受講者のなかから八乙女駅名の由来について説明があった)。私は八乙女という名前を聞いたとき、これはどういう意味なのだろう、と思ったのですね。でも、ここに住んでいる人は、そんなことは知っているわけです。あるいはここは大和町、なぜ、「たいわ」なのか、「やまと」ではないのか。考え出すと、おもしろいテーマはいくらでもあります。

これは地名の話ですが、地名だけではない。実は地域には学びの対象がものすごくたくさんあるのですね。学ぶというと、何かむずかしい学問や本に書かれたことばかりを

対象にしがちですが、私たちのまわりには、たくさん興味をもてることがある。そして、そういう世界に入っていくと、理解を深めていくと、自分の生活空間をどんどん豊かにしてゆくことができるんです。同じ道を歩いていても、風景が変わってくるし、楽しくなってくるはずですよ。

しかし、私たちは自分の住んでいる地域のことについて意外と知らないんですね。しかも、最近では知らなくても不都合はないし、なんとも思わなくなってしまうんですね、でも、百年ほど前までは決してそうではなかった。地域の人たちは自分たちが住んでいる地域の隅々までいろいろと知っていた。生きていくためにも、それが必要だったのです。それが、いつの頃からか変わってきて、最近ではどうも自分たちの住んでいる地域のことをみんな知らなくなってきたばかりか、知らないことになんかの不思議も感じなくなっている。知識の多い少ないは、自分たちの住んでいる地域のことではなく、自分たちの日常生活にはほとんど影響のないような、むずかしい知識の量で測られているようになってしまった。

しかも、今日みなさんはここへ自動車でいらっしやいましたね。自動車で来ると、あたりの景色はあまり見えないですね。自動車で来るのと、自転車で来るのと、歩いてくるのとでは、まちの風景は全く違いますね、私たちは今、ほんとうに忙しくなっているから、自動車に乗ることが多くなっていますが、そうすると、たまにちょっと歩いてみると、自分が住んでいる地域でも意外と知らないことが多いことに気づくのです。そういう意外と知らない自分たちの地域という側面を私たちはもっと意識しなければならないのではないかと思うのです。

会社をリタイヤすると地域社会との接点が増えてくる。そうすると、自分が住んでいる地域社会が豊かであるということがすごく重要なことになってきます。いや、リタイヤするしないにかかわらず、これまでは会社一辺倒、仕事一筋で生きてきたわけですが、だんだんとみんな、自分の生活の大切さということに気づいてきた。どんなに経済的な収入が多くても、自分の生活が豊かでなければ意味がないということに気づいてきたのです。生活の豊かさというのは、立派な大きな家に住んで、ものに取り囲まれて豪華な食事をするということでは必ずしもない、ということにも気づきだしてきた。そうなると、自分の住んでいる地域社会というものが、自分の生活にとって非常に重要な意味をもっているのだということがわかってきた。

ここ数十年、私たちは地域社会というものをきわめておろそかにしてきたと思います。地域社会というものを、行政に任せてきてしまい、なにか問題があると行政に文句をいうという具合でした。自分たちの地域は自分たちでつくらなければいけないはずなのに、それを誰かの手にゆだねてきた。その結果、行政は横並び発想が強いですから、日本全国がだんだん画一化してきた。つまり、地域社会の豊かさがだんだん失われてきた。あげくの果てに、地名も、せつかくよいものがたくさんあったのに、機能的な名前に変えてしまうことまで行われ(最近では少し動きが変わり、古来の地名への関心が高まっていますが) 昔の地名がどんどん失われてしまった。自分の名前を変えることの意味を考えれば、地名も簡単には変えられないはずですよ。地名は非常に重要な意味をもっている。地名を簡単に変えてしまうというところに、私たちが地域をどう捉えていたかが象徴されている。しかしここにきてやっと、自分たちの住んでいる地域を大切にすることが、自分たちの生活を豊かにすることになる、ということに多くの人気づきだしたのです。

そういう状況のなかで、地域学、あるいは地元学、言葉はいろいろですが、自分たちの住んでいる地域をもっと知ろうという動きがいま全国に広がりはじめています。

まちづくりということを考えてみましょう。かつては行政主導でまちづくりが行われてきた。あるいは私は今日、東京から来たわけですが、私のように東京から地元のことをろくに知らない人がやってきて、「この地域はこういうふうに関発したらいい」という具合にプランしてしまうようなことが行われていた。私もそれをしたことがあるんですが（笑い）でも、地域のことを知らないのですから、いいプランなんてできるわけがない。当然の結果として、そういう行政主導の、あるいは外部プランナー任せのまちづくりは、行き詰まり、やっぱりそういうことではいけない、ということにみんな気づきはじめたわけです。

まちづくりの出発点は、やはり地域を知ることから始まります。ところが仙台はどうかわかりませんが、東京の場合は、まちづくりに積極的だった行政の人たちですら、地域のことを知らない人が多いんですね。たとえば、私が少し関わらせていただいた東京都の杉並区では、ほとんどの職員が区民ではない。地価が高くなって、郊外に転出した人が多いためです。そうなってくると杉並区の職員は地域の実態からうとくなくなるという状況になってくるわけです。

そこで、ある職員が、杉並知る区ロードという企画をたてるわけです。これは絹の道、シルクロードをもじったものですが、杉並区のなかにいくつかの散策コースを設定し、それを「知る区ロード」と命名したのです。そして職員を含めて、区民たちに、この知る区ロードを実際に歩いて、もっともっと自分たちのまちのことを知ろうと呼びかけたのです。そうこうしているうちに、参加した人たちの間に、自分たちでも新しいコースをつくろうという動きが出てきて、どんどんコースが増えていった。

非常に面白かったのは、子どもたちがネコに出会えるコースというものを作ったのです。どこどこにいけば大きなネコと出会えるとか、たくさんのネコが集まっているところがあるとか、というような情報を集めて、ネコたちに出会えるコースをつくりあげたのです。このように、遊び感覚にあふれたコースがどんどん出てきたわけです。それをまた小冊子にして、市民みんなで歩いてみようというように、運動が広がっていったのです。地域を歩く楽しさや新しい発見の面白さをみんな実感していくわけです。

北海道に鶴川町という人口 8000 人くらいの町があるのですが、そのくらいの規模の町ですから、住民は町のことなら隅から隅まで知っているものと思われまます。ところが、あるとき自分たちは地域のことをあまり知ることがなくなってきたのではないかと、ということに気づき出す。その原因のひとつは自動車です。自動車は地方にいくほどよく使うようになっていきますから、鶴川町でもほとんど歩く機会がなくなっている。そのために地元のことが見失われているというわけです。そこで、大人の遠足ということで、大人たちがみんなで町を歩いてみた。すると、今まで気がつかなかったことや忘れていたこと、ちょっとした祠とか湿地などを、もう一度、みんなで思い出すことになる。そして、大人の遠足の結果として発見された「町の宝もの」を地図にまとめたのです。そこから地道なまちづくりがはじまってゆくわけです。

地域を歩いただけでも、これだけの効果がある。そして自分たちのまちに対する愛着が高まり、まちづくりに向けての活動が始まっていくのです。

こうしたものを一歩進めていったものが、地域学です。地域学の歴史というのはかなり古く、もっとも古い日本の地域学としては琉球学や長崎学があります。これはかなり専門的なものでして、琉球とか長崎がおかれてきた歴史的な事情を踏まえて、その歴史を学ぼうとするところからはじまったものです。そうした学問的な地域学とは別の地域学が、いま起こってきているわけです。この地域学は、むずかしい話ではなく、先にい

ったように杉並区の職員が歩いてまわって、なぜここはこんな地名なのかとか、なんでこの道は袋小路になっているのだろう、といったことを考えながら、自分の地域とそこでの生活や文化を学んでいくのですね。そして、それをみんなで共有してゆこうという動きがでてきています。さきほどいいました琉球学とか長崎学というのは、郷土史や歴史学にもつながる専門的なものですが、そうしたものでなく、もっと誰でもが気楽に参加できるような地域学が広がってきているわけです。もしかしたら、今日ここでやっている「自発する学びの場」というものも、そうしたもののひとつなのかもしれません。

大学が中心になって進めているものもあります。たとえば東京経済大学が多摩学というものをやっています。これは自分たちの大学のまわりのことがよくわからない、そこで多摩の歴史を知ろう、多摩でどういう生活がおくられてきたのかを知ろう、ということでもう十年くらい前になるでしょうか、多摩学というものを公開講座としてはじめたのです。そこで得られた成果は本になって出ています。

行政が主導しているものもあります。静岡県の掛川市がやっている掛川学というのが非常に有名です。これは生涯学習施策のひとつとしてはじめられました。生涯学習にもいろいろなものがありますが、一般的なものよりも、個性があってもっと気楽に学べるものはないかと考え、地域を学ぶということが出てきたわけです。そして、掛川学と命名し、住民によびかけたところ、非常に反響が多く、すっかり有名になりました。

これは市で取り組んだ例ですが、県がやっているものもある。いまちょうど生まれつつあるのが山梨学です。山梨県の生涯学習センターが中心になって推進しています。山梨県というところはさまざまな地形的な特徴があるところですが、去年は、富士山を切り口にして山梨のことを知ろうという活動をしました。今年は盆地がテーマです。こうしたことを契機にして、県内各地に山梨学に取り組むグループを育てていきたいと、県は考えています。

このあたりでは東北学というのが有名ですね、ただし、この東北学というのはあまりにもエリアが広いので、もうひとつ手応えがなく、そのために注意しないとセンス・オブ・ワンダーを高めることにつながりにくい面があります。

ちょっとかわったところでは、横浜学(楽)があります。横浜というところは以前から文化活動が非常に盛んなところでして、横浜の歴史を学ぶ会とか、横浜の中華街をなんとかする会とか、あるいは横浜というところはかつて家具づくりが盛んだっただけなのですが、その横浜の家具のことを考えるサークルなどといったものもあるわけです。そういった人たちが一緒になって横浜というものをいろいろな視点で考えてみようではないか、そしてお互いに交流しあっていったら、もっと横浜での生活は楽しくなるのではないかと、新しいものの見方が出てくるのではないかと、ということで、そういう活動に取り組んでいるグループが集まって横浜学(楽)連絡会議というものがつくられました。学ということになると勉強するというイメージになるというので、横浜楽とも言っています。

こんな具合に、各地でさまざまな地域学というものが展開しはじめています。そうしたなかでもとりわけ地道におこなわれているもののひとつが、水俣地元学です。水俣というはご存知のとおり水俣病で有名な熊本県の水俣ですね。水俣には山の水俣、海の水俣とふたつあります。水俣病が問題になったのは海の方ですが、水俣の奥の方には山の水俣があります、むかしは両者は盛んに行き来があったそうです。山の水俣のシンボルである神社にあるご神体は海の水俣からもってきた珊瑚なんです、それが象徴しているように、むかしから海の水俣と山の水俣は交流しあいながら、お互いに支え合ってきた

た。ところが、産業化の推進のなかで、そうした交流はどんどん切れていってしまい、さらにあの不幸な水俣病が起こってしまったために、交流が断たれてしまったのです。しかし、5、6年前からそれをもう一度取り戻そうという活動が起こってくる。

そこで使われたのが地元学です。なにをしたかといえますと、自分たちの地元の水の流れをちょっと追ってみることにしたのです。水俣病は海水の汚染から生じたわけですが、水というのは私たちの生活の基本である、ということで、まず山から海、あるいは海からまた山へと戻ってゆくことを含めてですね、水がどうかたちで動いているのか、地下水はどのように流れているのかということ、みんなで調べる活動をしてゆくんですね。そして、水のマップというものを作ってゆくのですが、そういう活動のなかから水をテーマにして水俣の町のことをみんなで学んでゆくということが広がっていく。当然のことながら、マップを作るには歩いていかなければならない。沢に行き、それがどこから流れてきているのか、湧水はどこから出てきているのか、そういうことをみんなで調べる。そこで山の水俣と海の水俣の人との心のつながりができてくるんですね。そういうことから今では水俣市は、日本で最も進んだ環境先進地になっている。いまや水俣病のイメージとはまったく違う、すばらしい地域社会が生まれつつあります。

このように、行政や大学が呼びかけて、あるいは住民グループが中心になって、全国各地で自分たちの地域のことをもっと知ろうではないかという動きが広がっている。意外と知らない自分の地域ということに気づいた人たちが、あるいはまちづくりをするには、まず地域を知らなければいけないということに気づいた人たちが、もっと地域のことを学んでゆこうとして、いろいろな人に呼びかけて、名前はいろいろですが、地域学というものを各地で起こしているということをお話ししました。

先ほど八乙女のことを聞きましたら、人名に由来するものだと言っさく答えてくださったように、地域のことを一番よく知っているのはその地域の人なんですね。実はそこに地域学の大きな意味がある。どこかの大学の先生よりも、地域の人が一番の先生になれる、というところが地域学の非常に大きな魅力なんですね。

これもまあ、余分なことですが、学校があまりわくわくしない、退屈なことになったひとつの理由は、先生がいて生徒がいて、先生から生徒への一方的な知識の押しつけ的な傾向が強すぎたことにも原因があるのではないかと、思います。教えるということは教わるということで、まさにここで半田さんたちがやっていることは、先生が生徒に教えるのではなくて、みんなで学び合おうという精神でやっている。そういう姿勢がとても大切なんです。ただ、ローマ史についてみんなで学び合おうと言っても、それはむずかしい。でも地域のことになれば、誰が生徒で先生かはまったくわからなくなる。地域の歴史についてはある人が詳しい、でもいまの地域の生活のありようなら別の人詳しい、という具合にテーマによってさまざまな人が先生になれるというところが地域学のすばらしいところなんです。

学ぶということのおもしろは、教えることでも教わることでもなくて、学び合いにあると思います。いま生涯学習が全国に広がっているのですが、非常に盛り上がっているところと、何となくかたちだけで終わっているところがあります。両者のどこが違うかという、押しつけ的に一方通行で、教える人と教えられる人がきちっとわかれているようなタイプの生涯学習をやっているところではなかなか盛り上がってこないですね。でも、おもしろく元気にやっているところは、たとえば掛川がそうですが、一人の人があるときは先生になったり、あるときは生徒になったりと、お互いの関係が交代するようなどころです。学びあう場になっている生涯学習は盛り上がっています。地域学とい

うのはまさにそれができるテーマなのです。

学ぶということは知識を吸収することではなくて、教え合い、気づいていくことだといえます。教えるという立場にたったとき、自分で学ぶようになる、この「学ぶことは教えることだ」ということが、学びの原点だということに気づかせてくれるのもまた、地域学なんですね。

地域学の効用はそれだけではありません。首都圏の郊外などでは、定年間際になって転居する人が増えているのですが、そのためなかなか地域に入り込めない人が増えています。地域社会に入れないと生活は決して豊かにならない。そのことにみんなが気づいてきた。では、どうしたら地域に入り込めるか、ということでみんな結構悩むわけですが、地域学はそうしたことのきっかけにもなるわけです。

もっとも、地域にいる人だけでは地域のことは見えてこないという面もあります。昔からそこに住んでいる人と、そこに新たに入ってきた新住民が一緒になって、その地域を歩くと、長く住んでいた人にもいろいろ新しい発見がある。新しく開発されたところでは、新旧住民のギャップが問題になるのですが、そうした問題を解決するうえでも、地域学は大きな効用を果たすという気がします。

このように地域学にはさまざまな効用があり、もしかしたらこれからの地方分権時代のひとつの柱になってゆくのではないかな、と思っています。

最後に、レジメに図が書いてありますが、それについて触れて私の話を終えたいと思います。地域のことを知ってくると、地域社会とはいったい何なのかという疑問を感じてきます。先ほども話に入るまえに、みなさんとちょっと雑談をしているときに、どなたかが公立大学というのは、どこか敷居が高いねというお話をされていました。公共施設というのは日本の場合、敷居が高いわけです。典型的には市役所がありますね。市役所というところは、ヨーロッパなどでは city hall と呼ばれるようにみんなのものなんですね、みんなが自由に出入りし、仕事場にも住民と職員との境界をつくるようなカウンターなどないんですね。日本の場合は、ガチッとカウンターがあって、そのなかには住民は入れませんね。いやそれ以前に、私たち住民は、そもそも市役所にはよほどのことがないかぎり行こうという気分にはなりません。でもヨーロッパでは市役所に人がたむろっています。自分たちの施設ですから。実は最近、日本でもそういった動きが少しずつ出てきています。

たとえば、東京都に東久留米市というところがあります。その市役所はほんとうに住民に開放されています。非常に便利なところに作られていて、1階がオープンスペースになっています。8時くらいまで誰でも自由に入れます。市役所の前は丸い広場になっています。午前中に行きますと、1回のロビーにお年寄りたちが集まっているんですね、喫茶店もあるんですが、そこでお茶を飲んだりしている。お昼を過ぎますと、小学生たちがやってくる、そのテーブルで勉強しているんですね。いや勉強しているかどうかわからないのですが、ノートをもって何かやっている。そのうちに中学生がやってくる。3時くらいになると、今度は奥様たちがやってくる。そして、夕方になると若者たちが集まってくる。そして、夜までたむろっている。ときにタバコを吸っている高校生がいらないわけではないのですが、みんなが共有できる空間になっているんですね。

8時か9時だったと思うんですが、中には入れなくなるんですが、今度は市役所前の広場が若者たちの集まりの場になるんですね。茶髪の若者たちがスケボーやったりして、たむろっている。市役所の前にそうした若者が集まってけしからんという住民がいらないわけではないでしょうが、でもそれはたぶん多数ではないんですね。むしろ住民みんな

の場所ということが大切にされているわけです。みんなが気軽に集まれる「みんなのもの」にしようという市役所の設計意図は、見事に成功しているわけです。

そのように市役所がみんなのものになる。それと同じように、この大学も本来はみんなのものにならねばならないわけですね。これだけの立派な施設があるんですから、住民の人たちも含めて、みんながもっともっと使い込んでゆくと、いろんなことができるはずですし、施設そのものが生きてくる。今回の学びの場に取り組んでいる半田さんや学生のみなさんの思いも、そうしたところにあるのだと思いますが、でもそれは大学や先生たちだけがいくらがんばっても難しい。住民のみなさんが一緒になってやる、ということがすごく大切なんですね。

地域学の一番の効用は、地域を知ることによって、住民たちがこのまちは自分たちみんなのものだという意識を高めてゆくことなのです。このまちが「自分たちみんなのもの」だと思えば、行政に何かを頼もうなどとは思わなくなる。道が汚れていたら自分たちできれいにすればいいだけの話なんですね。そういう動きが地域学から出てくるのではないかと思います。

話がまたずれましたが、社会とはいったい何なのか。それが最後に整理しておきたいことです。私たちは社会というときよく公と私という分け方をします。公的な空間、私的な空間、それぞれ行政が主導し、企業が主導している世界です。しかし、公でも私でもない、もうひとつの空間があります。それがいま言った「みんなの空間」です。ご年輩の方はご存知だと思いますが、昔は入会地という、地域の住民たちがだれでも使えるところがありました。鎮守の森だとか河川敷もみんなの場所だった。休日になると、みんながそこに行って掃除をしたり、手入れをしたりする。代わりに、みんなが良識にしたがって、山菜を採るなどして利用できた。そういう空間がどこにも必ずありました。ところがだんだんそういうところが国のものになったり県のものになったり市のものになっていってしまったんです。あるいは組合ができて管理するようになってしまった。そのため、みんなが関わらなくなってしまった。そして荒れてきた空間も少なくありません。公と私以外の、みんなのものという空間が、ここ数十年の間にどんどんなくなってしまった。それが社会を、大きく変えてしまった一因ではないかと思っています。

地域のことを学ぶということは、地域というものがみんなのものだったんだという意識を取り戻すことでもあります。私は12年前に会社を辞めて、それまでの組織人とは違った生き方をしようと思ったのですが、最初に関わったのが地元の小さな住民運動でした。地域社会に関わろうと思ったわけです。そこでカルチャーショックを受けました。地域社会なんてものが本当にあるのかとさえ思ったわけです。以来、さまざまなことに関わっているうちに、私の関心は「みんなのものの回復」に向いてきました。日本全国どこにいても、みんなのものが非常に荒れてきている。そのみんなのものを取り戻すにはどうしたらいいかが問われているのではないかと、そんな気がしています。

図を見てください。社会というものは公と私に大きく分けられる。公、パブリックセクターで活躍しているのが行政ですね。そしてプライベートセクターである私の世界、マーケットといってもよいと思いますが、ここで活躍しているのは企業です。そして、いまお話ししたように、もうひとつ、みんなのものという世界があるわけですが、これを公と私に対して「共」、あるいは「コモンズ」(みんなのもの)と呼びましょう。このコモンズの世界をどうするかということで今がんばっているのがNPOですね。日本では、欧米に比べて(もちろん途上国に比べても)この分野が育っていない。というよりも、公と私で社会を考えすぎてしまって、コモンズを壊してきてしまったのです。そして、

このコモンズこそが地域社会のことなのではないか。しかし、これからは、NPOと企業と行政体が一緒になって社会はつくられているという意識をもっと私たちはもたなければいけない。とりわけ地域社会というのは、市場でも行政でもない、みんなが作っているものなんだという意識をしっかりともたないといけないのではないかという気がします。

みんなの空間としてのコモンズ、コモンズとしての地域社会ということをもう一度しっかりわれわれは回復してゆかないと、冒頭に紹介したレイチェル・カーソンの沈黙の春ではないですけども、世の中は寒々としたものになっていくのではないかとこの気がします。

ところで、まちづくりなどでよくいわれることに、これからは住民でなくて市民でなければいけない、ということがあります。地域エゴを主張する住民ではなく、もっと広い視野の市民意識をもたなければいけない、といわれます。たしかに市民意識は大切ですが、むしろ「住民」という感覚のほうが重要なのではないかと私は考えています。

いま日本の社会でいろいろな問題が起こっていますが、この根底には私たちの生活が土（地域）から離れてしまったということがあるように思います。むしろこれからは、もっともっと地に足を付けた行動が必要ではないか。何かよくわからない普遍的な賢い市民意識などではなく、エゴといわれようと、住民という感覚をわれわれはしっかりとたなければいけないのではないかと。住民という感覚をもって、自分が住んでいる地域とはいったいどういうところなんだ、あるいはどういう歴史をもった場所なのか、そういうことをもっとしっかり学んでいかなければいけないのではないかと、そのことが私たちの生活を豊かにしてくれるのであり、そこに住んでいる人たちの心と心をつないでゆくことになるのではないかなという気がします。

グローバルという言葉があります。グローバルとローカルの合成語ですが、地域のことをしっかりと考えていくと必ずグローバルなところにつながるものです。地球はつながっていますから、地域もつながっているのです。逆にグローバルを意識しすぎて理論的に考えていくと、根無し草的な抽象論に落ち込んでしまいかねません。まず自分の立っている地域から考え行動する、そうした姿勢が大切です。そのためにも地域学は有益です。

欲張って話したために舌足らずになってしまったかと思いますが、ぜひみなさん方もこれを機会に、八乙女の問題や大和町のことなどに興味をもって地域のことをもっともっと勉強されるといいのではないかな、と思います。少し長くなりましたが、話はこれくらいにして、せっかくなのでみなさんからお話を聞きたいと思います。

どうも長い時間ありがとうございました。

佐藤先生どうもありがとうございました。お話はいつも僕らがやろうと試みていることを、非常にわかりやすく語っていただいたので、私自身はもうとても共感してたくさん勉強させていただきました。みなさんの方からいろいろご意見、ご質問があると思いますが、まず、私の方からどうしても聞いておきたいことがありました。

それは最後のところでお話しいただいた住民と市民という概念に対する考え方として、今一般に市民意識ということが叫ばれているなかで、むしろ住民という意識が重要なんだというご指摘、そのとおりだと思います。生活空間の大切さということに絡んでのことだと思うのですが。ただ、僕らが今回、この動きをするなかでいろいろなことがあったのですけれども、ある高等学校に行った際に、その校長先生とお話をしていると

きに、その先生がこんなことをおっしゃったのです。今の高等学校というのは、そこに来ている教員も生徒もほとんどがこの地元の住民ではないというのですね、ほとんどが遠くの地域から来ていると。だから、今回は地域における自発の学びの場というテーマでこの企画をやっているわけですが、地域という感覚が捉えにくい、ということだったんですね。

この話に象徴されるように、住民というサイドに立ったときに、この人は勤務地や通学地をもって、それが住んでいるところとはかなり離れていることが多くある。そうすると地域感覚というのはどこで芽生えるものなのか、それは住民という意識の場においてなのか、それともその意識を越えたあるいは市民という意識の場においてなのか。もしかしたら、その二つがあってもよいのですが、どちらが主体となるのでしょうか。

佐藤 はい、私は居住地も勤務地もその人にとっての地域として考えるべきだと思うんですね。住むというのはなにも寝起きだけではないと私は思っています、勤務地も学校も自分の生活の拠点であって、自分の住んでいるところと考えるべきではないかと思えます。自分は居住地で寝泊まりするから、ここの地域だけが維持されればよいと、こちらは昼間の勤務地だから環境汚染をしてもよいという考え方になることは恐いことですね。現代の問題は、住んでいる人がどちらも地域という感覚を失っていることだと思います。そういう意味でいずれにおいても住民意識をもつということが大切だと思うのです。

実際に職場でも住民意識をもつということも少しずつできています。たとえば、有名なものでは東京の丸の内町内会というのがあります。東京駅の丸の内口の近くの会社に勤めている人たちが中心となって町内会を作ったんですね。そして、みんなでその地域のゴミをできるだけ少なくしようとか、地域の汚れを自分たちできれいにしてゆこうとかいった活動をはじめている。これは自分たちの勤務地も自分たちが住んでいるところだという意識の芽生えだと思います。

それから企業でも、たとえばボディショップでは、ある地域に開店したら、その地域を職員がみんなで掃除をするといったことが結構自然におこなわれています。これも、自分たちがお店をもって仕事をしているところは自分たちが住んでいるところだという意識のあらわれだと思います。高校の先生が住居と違う地域に勤めているのだとしたら、そこも自分のもうひとつの住みかだという意識をもっていかないかぎり、地域に根ざした教育にはならないのではないかなという気がします。

でもさらに言えば、もっと大切なことは、住みかと職場はできれば一致すべきだと思います。いま、地産地消ということがいわれています。これは食べ物の問題です。地域で産したものを地域で消費する。身体と土とはふたつのものではないということ（身土不二）地域で作ったものを地域で食べるということで、土とのふれあいのなかで、健康が維持されるという考え方ですね。

現代のさまざまな問題の根底にあるのは、分業体制です。生産と消費が、生活と仕事、みんな分かれていることですね。ゴミ問題もそうです。自分たちの地域で出たゴミはどっかよくわからないところをもって行って焼却してしまう。そこに問題がある。どこで作ったかわからないものを食べる、これも問題ではないか。住民意識をもつということは、実はこういうものを束ねてゆく、つなげてゆくという意識をもつことであり、いまの時代のあり方を大きく変えていくことなのです。

直接、質問に答えるとすれば、二つともが自分たちの住んでいる地域社会であると考えべきだというのが私の意見です。もしその場所が違うという人がいるなら、両者をどうつなげるかということを考えるべきだと思います。

Q 僕は最近、警察官のあり方について考えるのですが、警察官というのは地域のことをすごく知らないとならないですね。しかし、だからといって地域の住民と混じってなれ合いのような状態になることは許されないことのように思うのですが、そのあたりのことが警察官というのは微妙なところがあり、公務員を考えるうえでも重要な鍵があるように思うのですが、どう思われますか。

佐藤 かつて町のおまわりさんや在所の駐在さんは、各家庭を訪問し、そこでお茶を飲んでいたり、といったイメージがあると思うのですが、そういうある意味で地域社会の潤滑油的な役割を果たしていましたね。それがだんだんと地域に根ざした行動から離れてきてしまっている。ただ、それは地域とのなれ合いをつくってはいけないので離しておく、という方針のもとでそうやってきているのではないように思います。そのことのほうが問題ではないか。暴論に近いと思うのですが、私はおまわりさんにせよ、何にせよ、できるだけ地域に根ざすべきだと思います。癒着するかどうかということは別の問題ではないかと思うんです。

Q このレジメにある図がおもしろいなと思ったのですが、公と私と、そしてこのあいだにコモンズがあると、私たちのこれまでの生き方というのはこの公と私のあいだの行き来であって、その中間地帯であるコモンズにおける時間を見失っていたところがあり、まさにご指摘のとおり、コモンズの重要性に気づくことは大切な課題だと思います。

ただ、私たちはこれまでこの公と私のあいだの混同ということも、よくいわれる公私混同という意味とはやや異なる意味でしてきたのではないか、という問題も考えたく感じています。というのは、一般に公私混同といわれるときは、公の部分に私を持ち込むことを非難するというわけですが、私はむしろ「私」の部分にまで「公」を延長させていることが常識のごとく思われている風潮を問題にしたいと思うのです。先の警察官の例がひとつだと思うのですが、彼は公務として仕事をおこなっているときは、確かに地元との接点をもつということが平気で「私」の領域に入ってゆくようなかたちでおこなわれてはならないのだと思います。あくまで公務に忠実であるべきだと思うのです。ところが、その警官も勤務を終えてあきらかに公務を離れるときがあるわけですね。そうになったら、その警官はもはや警官ではなくて、完全な私人になるわけで、その区別は明確になされてしかるべきだと思うのです。ところが、私たちの常識なるものは、どうも私人のときにまで、公のその人を延長させて解釈することを当然のようにしています。たとえば、「警察官とあろうものが」とか「教育者として」などと。こうした言表はむしろその公務にあたっている時間には発せられることがあったとしても、勤務外においてまで語られることがあってよいのでしょうか。とりわけ公というこの世のすべての人々が共有するステージにおいて、その場ではいかに振る舞うべきかという「べきか」論を語り、その型の保護に努めるような職業である警察官や教育者などは、公私の区別を明確にして「私」のときはできるかぎり公の規範から自由にならないと、バランスを逸することにもなりかねない気がします。私は公務員こそ、公私を明確につけ、「私」であるときは公務員の立場というところからまったく離れることがだいじだと思うのですが、どう思われますか。

佐藤 確かに日本では特にそういう傾向があるでしょうね。でも、なかなか勤務時間中は公人で、それを離れたら私人になるということは難しい。事実、行政の人はまちづくりの住民運動をあまりやらないんですよね。それはいろいろな理由がありますが、ひとつには自分たちは仕事としてもうまちづくりをしているから、仕事以外ではそれをやなくていいだろうという思いがある。でも、ほんとうは公と私などには拘束されずに、ひとりの住民として仕事と生活をつなげていく、また素直に行政の人もまちづくりに参加するようにするといいと思います。

人間はどこにいても同じ反応をすべきだと私は思っています。会社がなぜ問題を起こすかといえば、個人ではおかしいと思うことを会社のなかでは会社の仕事だから仕方がないなと思って、個人の意思とは異なる判断をする、それによっておかしくなった会社というのは結構あると思います。だから、常に自分というものをしっかりもっていて、これは仕事だから、これは自分の生活だからとがらっと変えるということは、現実にはできないし、やるべきではないように思うのですが。

Q しかし、たとえば会社が妙なことをしているときに、それがおかしい、まちがっていると感じたとき、そのことを訴える、明るみに出すということをするすれば、それは完全に私人になるという立場がとれないかぎり、それが社会習慣的に認められないかぎり、できないように思えるのですが。これまでの日本社会でいわれてきた会社人間の悲哀はこの大切な「私」という自分をもつことが許されず、たびたび組織的暴走を許容してきたことであり、そのことは会社だけでなく、政治家もその他公務員も医療関係者も、みんな同様であったと思うのですが。

佐藤 たしかにそういう現実があったし、いまもある。でも、組織というのは所詮、人間の集まりですから、そこでメンバーが自由に自分を主張できる組織でなければ健全な発展はしないと思うのです。実際にも、そうした考えは出てきている。企業はかつてはピラミッド構造のなかで社長のいうことは絶対だという時代があった。今でもまあそれに近いのですが、たとえば、ソニーはプラットホームという考え方を出して、会社というのは人間が使い込む装置である、舞台である、だからみんな思い切り自由にものをいうべきだ、それが企業としての力を高めていくとっているわけですね。そういう方向に組織は変わりつつあると思います。だから、組織に従属するという考え方は捨てるべきだと思います。組織は所詮は人間が作った仕組みですから、それをどう使い込むかですよ。そのときに組織人だからこう発言すべきだと自己規制するのはやはり危険だという気がします。

Q 僕は今の話を聞いていると、やはり佐藤さんのいう通りかなと思ひまして、やはり学生であれば24時間学生であって、どこに行っても宮城大学の学生という見方はされ、中学生であれば、学生服を着ているのでどこにいても、その時点で中学生という身分を語っているわけで、だから、その仕事とか学生という身分を引きずることが必ずしも悪いことではなくて、むしろそれをプラスにしてゆく方向というのはないのかな、と、そういう意味でコモンズがあればいいのではないかという気がするんですけど。むしろそこで公務をシャットダウンするのではなくて、公務を引きずっていてもうまく利用できる空間、それが望ましいのではないかという気がします。

他にもみなさん、いろいろなご質問、ご意見があったことかと思いますが、残念ながら時間がもう超えていまして、この話題を一時間で尽くそうということは基本的に無理があったわけですが、最後の最後にもう一件だけ、受け付けて終わりにしたいと思います。

Q 公私の明題は私も意見がありますが、それを始めるとまた時間がかかりそうなので、それはやめておきます。別の話で、千葉都民という言葉がありますね。私はこの人間ではなく、3年前にリタイヤして、やはりまだ、一種の千葉都民的な感覚があって、だから青森だろうが、北海道だろうが、九州だろうが、みんなスクラッチの目でみている。それも悪くはないなというふうに、うまくはいえないけれど、思っています。それを言いたかった。

Q スクラッチというのはどういう意味ですか。

Q 片思い的な、あるいは「おらほが一番だ」みたいな肩に力を入れないで、平均感覚というか、よそ者だからなのかもしれないし、あるいはニュータウンに住んでいるから、多摩ニュータウンみたいなところですよ。ここは。

佐藤 そういう具合に議論をしてゆくと、新しい文化ができてくるんですね。

Q いわゆる言葉は悪いけど、原住民がいないから、まったく会社辞めてから、我が家のまわりにはこういう人が住んでいると、今はじめてね、ゴミに集積場に自分でゴミ出して、わかったような、これが本音なんで、地域なんて、どこに住んでいてもしなきゃならない最低ラインを今やっているのが、まあいまの私です。

佐藤 そのようにどんどんいろいろな意見が出てくることで、ほんとうに新しい町が、これからできていくんですよ。コミュニティが。これからは楽しみですよ。

Q 最後にひとつ。この図の右側に職住が二つに分かれているわけですがけれども、このあたりにやはり中選挙区制というものをもういっぺん見直さなきゃいかんのではないかなあ、と、小選挙区制でこれだけ投票率が下がってあるわけですね。やはり、これは少し広い範囲にして中選挙区制に戻して、投票率をあげるようにしたらよいのではないかなと思っています。

まだ、いろいろおありかと思いますが、このあたりで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(文字おこし：半田智久)